



宮城県の 絶滅のおそれのある 野生動植物2026

普及版



はじめに



宮城県は、東は太平洋に、西は奥羽山脈に面し、県土の北東部に北上山地が、南部に阿武隈山地が連なっています。そしてその間に、これらの山地を水源とする北上川や阿武隈川などの河川が流れ、その流域には広大な仙台平野が広がっています。さらに、内陸北部には伊豆沼・内沼、蕪栗沼・周辺水田、化女沼、そして沿岸部には志津川湾と、県内にはラムサール条約湿地に登録されている4つの貴重な湿地があります。また、唐桑半島から牡鹿半島に至るリアス式海岸や特別名勝松島など、変化に富んだ海辺が、美しい自然景観を有しています。

この豊かな自然の中に、多種多様な野生動植物が生息・生育していますが、開発や環境の変化により、依然として多くの種が絶滅の危機に瀕しています。県では、これらの希少な野生動植物種の保護・保全を図るため、平成13年3月に『宮城県の希少な野生動植物－宮城県レッドデータブックー』を発行し、平成28年3月には、東日本大震災による自然環境の変化を反映させた『宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 2016』を発行しました。

その後、気候変動の影響や外来種の侵入など、野生動植物を取り巻く環境の変化を踏まえ、最新の生息・生育状況を評価するため調査検討を重ね、令和6年3月に「宮城県の希少な野生動植物－宮城県レッドリスト2024年版－」を公表しました。そしてこのたび、前回発行から10年の節目を迎えるにあたり、2024年版レッドリストの評価結果に一部最新の調査結果を加え、『宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 2026』として取りまとめました。

国内では、「生物多様性国家戦略2023－2030」において、生物多様性の損失を止め、反転させる「ネイチャーポジティブ(自然再興)」を2030年までに達成するという目標が掲げられています。すべての野生動植物は生態系の中で密接に繋がっており、私たちの暮らしは、健全な生態系がもたらす水や空気、食料といった自然の恵みによって支えられています。このかけがえのない財産を後世へ受け継ぐためには、私たち一人ひとりが足元の自然に目を向け、行動を起こすことが不可欠です。

本書により、県民の皆様が野生動植物への理解を深め、保護・保全活動のきっかけになれば幸いです。

令和8年3月

宮城県知事 村井 嘉浩

目 次

I 宮城県レッドデータブックの作成過程	1
1 レッドデータブックとは	1
2 宮城県レッドデータブック	1
(1) 目的	1
(2) 調査地域及び調査対象範囲	2
(3) 検討及び調査の体制	2
II カテゴリー区分と選定の結果	4
1 カテゴリー区分	4
2 宮城県レッドデータブック2026における改訂の概要	7
3 植物編	
(1) 蘚苔類	10
(2) 維管束植物	12
4 動物編	
(1) 哺乳類	33
(2) 鳥類	36
(3) 両生類・爬虫類	44
(4) 汽水・淡水魚類	46
(5) 昆虫類	52
(6) 海岸地域の無脊椎動物類	78
(7) 淡水産貝類	85
5 群落・群集	
(1) 植物群落	87
(2) 干潟の底生動物群集	95
III 宮城県レッドリスト	97
IV 索引	112

I 宮城県レッドデータブックの作成過程

1 レッドデータブックとは

世界的な自然保護団体である国際自然保護連合(IUCN)は、昭和39年(1964年)に初めて、世界全域における絶滅のおそれのある種の現状を取りまとめ、その際に発行した報告書の表紙に、危険を象徴する赤い紙が使われていたことから、以後このような報告書を「レッドデータブック」と呼ぶようになりました。

日本でも平成元年(1989年)と平成3年(1991年)に(財)日本自然保護協会・世界自然保護基金日本委員会及び環境庁(現環境省)・(財)日本野生生物研究センターにより、それぞれ『我が国における保護上重要な植物種の現状』と『日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—(脊椎動物編および無脊椎動物編)』が発行されて以降、レッドデータブックに関する取組は地方自治体にも広がりました。レッドデータブックは、調査対象とした地域的規模により得られる結果が異なります。つまり、世界、日本、都道府県のそれぞれのレベルにおける「絶滅のおそれ」は必ずしも一致しません。全国的には絶滅の危機にない種でも、県レベルでは絶滅の危機に瀕している種もあります。

2 宮城県レッドデータブック

本県においても、絶滅のおそれのある野生動植物等を明らかにするという観点から調査を行い、平成13年(2001年)に初めて『宮城県の希少な野生動植物—宮城県レッドデータブック—』を、平成28年(2016年)に改訂版として、『宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 2016』を発行し、10年ぶりとなる令和8年(2026年)に今回の『宮城県の絶滅のおそれのある野生動植物 2026』を発行しました。

(1) 目的

宮城県版レッドリストは、本県に生息・生育する野生動植物及び本県の自然環境を象徴する植物群落、また底生動物の生息場所として重要な干潟を対象として、それぞれ現状を把握した上で、緊急に保護することが必要な野生動植物種、植物群落、干潟を明らかにし、対象となる種をその絶滅の危険度に応じて区別し、リストアップしたものです。レッドリストについて、それぞれの解説や写真を加えてまとめたものがレッドデータブックになります。

レッドデータブックを広く県民に公開し、情報を提供することによって、絶滅のおそれのある野生動植物種、植物群落、干潟への理解を深め、本県の自然環境保全への配慮を促すことが作成の目的です。また、自然環境に関わる事業者や関係機関が積極的に活用することにより野生動植物、植物群落、干潟の保護保全対策が着実に進められ、ひいては、本県における生物多様性の保全に資することも目的としてあげられます。

(2) 調査地域及び調査対象範囲

調査地域は県内全域で、調査対象範囲は、植物種については蘚苔類、維管束植物、動物種については哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、汽水・淡水魚類、昆虫類、海岸地域の無脊椎動物類及び陸域の無脊椎動物類(淡水産貝類)としました。そして、生息・生育の現状を把握した上で、調査結果から調査結果から絶滅のおそれのある動植物種を選定しました。

また、個々の種だけではなく、野生動植物が生息・生育する空間的広がり(生態系)としての重要性の視点から、県内の植物群落ならびに底生動物の生息エリアである干潟等について調査を行いました。植物群落については、県内に分布する貴重な植生や存在が危険にさらされている植生を選定しました。また、ある程度の規模を持った干潟等について底生動物に着目した調査を行い、その中から生物多様性に富む重要な干潟として20か所を選定しました。

(3) 検討及び調査の体制

レッドデータブックの編集方針、構成構成、そして種、植物群落、重要な干潟の選定方法及び記載項目について検討を行うために、平成19年(2007年)7月に「宮城県希少野生動植物保護対策検討会」(以下「検討会」という。)が設置されました。また、実際に野生動植物、植物群落、干潟の底生動物群集の調査を担う調査員を調査対象ごとに組織した、「宮城県野生動植物調査会」が同時に設置されました。この調査会では検討会の委員がそれぞれの種、植物群落、干潟を取り扱う分科会の代表となり、各分科会に所属する調査員が、既存の文献調査や標本調査、現地調査等を行い、種、植物群落、干潟の底生動物群集の現状についての情報を収集しました。

なお、検討会の委員は表1のとおりです。

表1 宮城県希少野生動植物保護対策検討会名簿

氏名	所属・役職等	担当分類群
鈴木 孝男	みちのくベントス研究所 所長	会長 海岸地域の無脊椎動物類 干潟の底生動物群集
平吹 喜彦	東北学院大学 名誉教授	副会長 植物群落
溝田 浩二	宮城教育大学教育学部 教授	副会長 昆虫類
太田 宏	東北大学高度教養教育・文化支援機構 助教	両生類、爬虫類
小室 智幸	日本野鳥の会宮城県支部 支部長	鳥類
斉藤千映美	宮城教育大学教職大学院 教授	哺乳類
滝口 政彦	宮城植物の会 顧問	植物
旗 薫	株式会社エコリス	汽水・淡水魚類
藤本 泰文	宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団 主任研究員	陸域地域の無脊椎動物類 (淡水産貝類)

II カテゴリー区分と選定の結果

1 カテゴリー区分

カテゴリー区分については、環境省が第5次レッドリスト(2025～)及び第4次レッドリスト(2012～)で採用した、絶滅確率等の数値基準により客観的な評価を加えたカテゴリー(以下「環境省カテゴリー」という。)に準じた各カテゴリーを採用しました。しかし、環境省カテゴリーにおいて採用する定量的要件(数値基準)は、今回の調査対象となった多くの動植物種について、過去の数値的なデータが存在しない等の理由から採用しませんでした。

さらに、生物多様性の保全に資するための基礎資料として、絶滅危険度からの評価のみならず、宮城県独自の視点から、「要注目種」というカテゴリー区分を設けました。これらの種は現時点では本県で普通に見られるため、環境省カテゴリーに準じた絶滅危険度から設定した各カテゴリーには該当しないものの、特徴のある生息・生育状況等により注目すべき種として定義づけたものです。具体的には「隔離分布種」、「分布北限・南限種」、「基準産地種」、「その他」の4種を設定しました。

以上のことを踏まえて、環境省のカテゴリー区分と本県のカテゴリー区分の対応関係は表2、本県で採用したカテゴリー区分は表3のとおりです。

なお、植物群落については表4のとおりです。

表2 環境省カテゴリーと宮城県カテゴリーの対比

環境省カテゴリー	宮城県カテゴリー
絶滅(EX)	絶滅(EX)
野生絶滅(EW)	野生絶滅(EW)
絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類(CR) 絶滅危惧ⅠB類(EN)	絶滅危惧Ⅰ類 絶滅危惧ⅠA類(CR) 絶滅危惧ⅠB類(EN)
絶滅危惧Ⅱ類(VU)	絶滅危惧Ⅱ類(VU)
準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧(NT)
情報不足(DD)	情報不足(DD)
絶滅のおそれのある地域個体群(LP)	絶滅のおそれのある地域個体群(LP)
	宮城県独自のカテゴリー
	要注目種 隔離分布種 分布北限・南限種 基準産地種 その他

表3 カテゴリー区分

区分および基本概念	具体的要件
絶滅 Extinct(EX) 本県ですでに絶滅したと考えられる種	環境省カテゴリーの「絶滅」に相当 過去に本県に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、本県では既に絶滅したと考えられる種
野生絶滅 Extinct in the Wild(EW) 飼育・栽培下でのみ存続している種	環境省カテゴリーの「野生絶滅」に相当 過去に宮城県内に生息していたことが確認されており、飼育・栽培下では存続しているが、野生ですでに絶滅したと考えられる種
絶滅危惧Ⅰ類 Critically Endangered + Endangered(CR+EN) 本県において絶滅の危機に瀕している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	環境省カテゴリーの「絶滅危惧Ⅰ類」に相当 次のいずれかに相当する種 ①既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 ②既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。 ③既知のすべての個体群が、その再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 [絶滅危惧ⅠA類] Critically Endangered(CR) ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。 [絶滅危惧ⅠB類] Endangered(EN) IAほどではないが、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable(VU) 本県において絶滅の危険が増大している種 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のカテゴリーに移行することが確実と考えられるもの。	環境省カテゴリーの「絶滅危惧Ⅱ類」に相当 次のいずれかに該当する種 ①大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ②大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化している。 ③大部分の個体群でその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している
準絶滅危惧 Near Threatened(NT) 存在基盤が脆弱な種 本県において、現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては、「絶滅危惧Ⅰ類」として上位に移行する要素を有するもの。	環境省カテゴリーの「準絶滅危惧」に相当 次に該当する種 生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれのあるもの。 ①個体数が減少している。 ②生息状況が悪化している。 ③過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 ④交雑可能な別種が侵入している。

情報不足 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種	環境省カテゴリーの「情報不足」に相当 環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性(具体的には次のいずれかの要素)を有しているが、生息状況をはじめとして、カテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種 ①どの生息地においても生息密度が低く希少である。 ②生息地が局限されている。 ③生物地理上、孤立した分布特性を有する(分布域がごく限られた固有種等)。 ④生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。
絶滅のおそれのある地域個体群 Threatened Local Population (LP) 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの	環境省カテゴリーの「絶滅のおそれのある地域個体群」に相当 次のいずれかに該当する地域個体群 ①生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合、絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。 ②地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。
要注目種 本県では、現時点で普通に見られるものの、特徴ある生息・生育状況等により注目すべき種	本県独自のカテゴリー 宮城県内では、現時点では普通に見られるため、上記のカテゴリー(※1)には含まれないが、下記に該当するため、その生息・生育状況に注目すべき種 ※1「絶滅～絶滅のおそれのある地域個体群」カテゴリー
隔離分布種	本県では、現時点では普通に見られるものの、日本における分布が稀である種又はその分布が分断されている種
分布北限・南限種	本県では、現時点では普通に見られるものの、日本における分布の北限又は南限とされる種
基準産地種	本県内に基準産地を有する種
その他	隔離分布種、分布北限・南限及び基準産地種には当たらないが、各分科会において、注目に値すると考えられる種

表4 植物群落カテゴリー区分

区分	具体的要件
壊滅(D)	群落は壊滅した。
壊滅状態(4)	群落は全体的に壊滅状態にあり、緊急に対策を講じなければ壊滅する。
壊滅危惧(3)	対策を講じなければ、群落は徐々に悪化して壊滅する。
破壊危惧(2)	群落は当面保護されているが、将来破壊されるおそれがある。
要注意(1)	現在、保護・管理状態がよく、当面破壊されるおそれが少ない。しかし、監視は必要である。

2 宮城県レッドデータブック2026における改訂の概要

宮城県では、2016年の発行から10年目となる2026年に、レッドデータブックの改訂版『宮城県レッドデータブック2026』(RDB2026)を公表しました。ここでは、分類群ごとに改訂結果の概要を示します。

蕨苔類では、新規に選定されたのはDDの1種のみでした。これにカテゴリーの変更を加えると、CR+ENが28種、VUが8種、NTが1種、DDが6種で、合計で43種になりました。

維管束植物では、新規に選定されたのが135種でしたが、リストから削除されたのが24種あり、差し引き111種の増加となりました(RDB2016:513種→RDB2026:624種)。また、カテゴリーが変更された種も多くありました。最終的には、EXは1種増加して16種に、EWIは1種で変わらず、CR+ENは206種→227種と21種増加、VUは158種→200種と42種増加、NTは84種→157種と73種増加、DDは10種→7種と3種減少、要注目種は39種→16種と23種減少ということになりました。

哺乳類では、RDB2016で19種であったレッドリスト種は今回の改訂で26種となりました。これは、海棲哺乳類がDDに4種、LPに2種が新規に追加選定されたことに加え、ノレンコウモリ(旧ホンドリノコウモリ)がCR+ENに追加されたことによります。最終的には、EXが2種、CR+ENが2種、VUが4種、NTが6種、DDが6種、LPが4種、要注目種が2種の合計26種が選定されました。

鳥類では、RDB2016で57種(当時はヒシクイを種として評価されていたが、今回の改訂において亜種ヒシクイと亜種オオヒシクイとに別々に評価されるようになったことから、これを勘案すると58種に相当)であったレッドリスト種は、今回の改訂で新規に追加されたのが12種、削除されたのが4種であったことから、合計で66種になりました。最終的には、CR+ENが11種、VUが18種、NTが30種、DDが4種、LPが1種、要注目種が2種の合計66種が選定されました。

爬虫類では、ヒガシニホントカゲが新規にDDに選定され、アカウミガメがDDからENに引き上げられました。その結果、ENが1種とDDが5種の合計6種が選定されました。

両生類では、タゴガエルとヤマアカガエルが新規にNTに選定され、トノサマガエルが要注目種からVUにカテゴリーが引き上げられました。その結果、VUが1種、NTが7種、LPが2種の合計10種が選定されました。

汽水・淡水魚類では、RDB2016で28種であったレッドリスト種は新規に12種が選定され、2種が削除されたので、RDB2026では38種に増加しました。削除されたスナヤツメ類は、新たにキタスナヤツメとミナミスナヤツメに区別されて新規に選定されました。また、これまでCR+ENとされていた種のうち6種については、CR(4種)とEN(2種)に分別して選定されました。その結果、CRが6種、ENが6種、VUが6種、NTが13種、DDが3種、要注目種が4種の合計38種が選定されました。

昆虫類では、RDB2016での214種がRDB2026では3種増加して217種になりました。CR+ENとされていたクロシジミが新たに絶滅種に加えられました。また、今回の改訂では定量判定による基準の見直しが行われた結果として、カテゴリーの変更が多かったです。最終的には、EXが6種、CR+ENが38種、VUが40種、NTが75種、DDが58種の合計217種が選定されました。

海岸地域の無脊椎動物類(海岸動物)では、RDB2016では70種であったレッドリスト種に、新たに追加で選定された30種が加わり、一方10種が削除されたことから、差し引き20種が増加し90種になりました。カテゴリーの変更もあり、最終的にはCR+ENが11種、VUが24種、NTが33種、DDが22種の合計90種となり、NT以上のカテゴリーでは選定種の増加が目立ちました。

陸域地域の無脊椎動物類(淡水産貝類)では、今回の改訂での新規追加や削除はなく、カテゴリーの変更はヒガシタブネドブガイがDDからVUに引き上げられた1件のみでした。このため、CR+ENが3種、VUが3種、NTが2種、DDが3種の合計11種が選定されました。

植物群落では、群落全体について体系・呼称等の抜本的な見直しがなされました。このためRDB2026では、これまで単一群落として120カ所であったものが111カ所に、群落複合として62カ所であったものが70カ所に再編されました。最終的には単一群落では壊滅が2カ所、壊滅状態が19カ所、壊滅危惧が22カ所、破壊危惧が36カ所、要注意が32カ所となり、群落複合では壊滅が3カ所、壊滅状態が13カ所、壊滅危惧が21カ所、破壊危惧が18カ所、要注意が15カ所となり、両群落タイプ合わせて181カ所が選定されました。

重要な干潟については、宮城県に存在する干潟のうち底生動物群集の生息にとって重要であるとして、RDB2016では17カ所の干潟が取り上げられていました。今回の改訂では、石巻市の雄勝湾、東松島市の長浜海岸、山元町の坂元川河口を新たに重要な干潟として選定したことから、重要な干潟の総数は20カ所になりました。RDB2026では、最近までの調査の結果を受けて、震災後の復旧と現状について、また選定理由について最新の情報を基に内容が改訂されました。

次に、レッドリスト種の動向と課題について考えてみます。

全体を俯瞰してみると、多くの分類群で、RDB2016に比べて、RDB2026では、選定された種数が増加していました。レッドリスト種総数で見ると、植物で1.2倍、動物で1.13倍であり、植物群落では0.99倍、重要な干潟では1.18倍でした。また、カテゴリー別にみると、植物ではCR+ENが1.09倍、VUが1.25倍、NTが1.87倍、動物ではCR+ENが1.28倍、VUが1.18倍、NTが1.24倍となっていました。植物のNTにおいて2倍近くに増加していたのは注目されます。他は概ね1.2倍前後であり、RDB2016に比べて、RDB2026では2割程度の増加が見られたと言えます。総掲載種数は、RDB2016で967種

であったものが、今回の改定で1000種を超え、1133種になったことは注目に値します。また、カテゴリーが変更された種は、植物で75種(全体の11%)、動物で91種(全体の19%)でしたが、そのうち、上位のカテゴリーに引き上げられたのが植物では68%、動物では81%でした。このように、2016年にレッドデータブックを公表した時に比べて、10年間で野生動植物種の生息・生育環境がより危機的な状況に変化してきたことは明らかです。

ところで、東日本大震災や豪雨による水害あるいはそれに伴う復旧工事等においては自然環境が各所で改変されました。緊急でない場合の工事の際には、その場所に生息・生育する野生動植物の保護や保全について多くの配慮がなされた一方、それらの工事で絶滅の危険度が増した種もいるものと考えられます。

東日本大震災から2026年で15年が経過し、被災地における復旧工事等はほぼ完了しました。今後、野生動植物は、自然の営みの中で個体群の回復を遂げていくものと思われませんが、人為による影響が止まることはないでしょう。希少な生物種の現状を把握し、それらの種の保護・保全を考え、ひいては生物多様性を保持していく方策を編み出し実践していくことは、今後の大きな課題です。今回のレッドデータブックの改訂を踏まえて、これ以上絶滅が危惧される動植物が増加していくことを抑え、生物多様性の損失を止め、自然を回復していく方向に舵を切り、ネイチャーポジティブを実現していくことが望まれます。

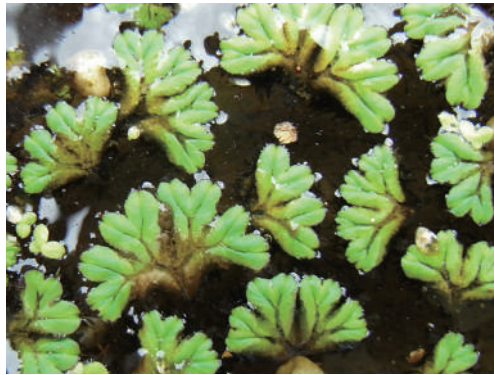
3 植物編 (1) 蘚苔類

ゼニゴケ目ウキゴケ科

イチョウウキゴケ

Ricciocarpos natans

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：横山 正弘)

(執筆：植物分科会)

大形のウキゴケ類で、水田やため池の水面に浮かんで生育している蘚類です。本種は、蘚類の中で唯一水面に浮遊する種です。落水後には、地面上にも生育します。

植物体は葉状で、長さ1~1.5cm前後で緑色~赤紫色をしており、イチョウの葉のような形をしています。植物体の腹面には、長いリボン状で縁に微鋸歯がある、紫色をした腹鱗片を密につけています。

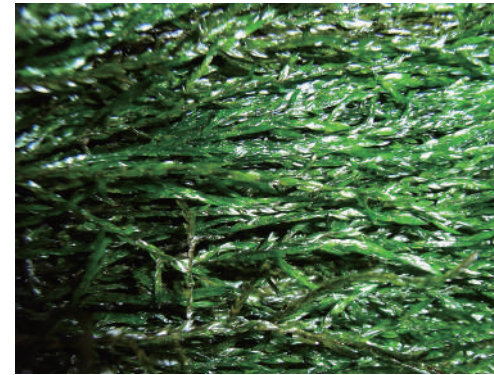
本種は、北海道から沖縄、世界各地に広く分布しており、県内でも水田地帯に広く生育していますが、耕作放棄や除草剤散布等の影響により、各地で個体数が激減しています。

ハイゴケ目カワゴケ科

クロカワゴケ

Fontinalis antipyretica

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：横山 正弘)

(執筆：植物分科会)

丘陵地帯の河川、湧水で涵養される水路などの流水中に生育する蘚類です。

植物体は黒緑色を帯び、長さ30cmほどに生長します。葉は卵形で鋭く尖り、中央で折りたたまれ、流水に適応した流線形をしています。

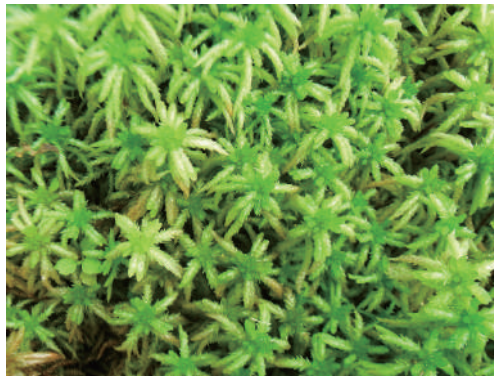
本種は、北海道、本州、北半球に広く分布し、水質の良い河川などにしか生育しないことから、水質汚濁の指標種となっています。県内では、生育地が局限されており、河川の護岸工事や水路の改修等による生育環境の悪化により、個体数が著しく減少しています。

ミズゴケ目ミズゴケ科

オオミズゴケ

Sphagnum palustre

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：横山 正弘)

(執筆：植物分科会)

ミズゴケ類(蘚類)の中では最も一般的な種で、山地の湿った地上に大きな群落を作って生育します。

植物体は灰緑色~黄褐色で、茎の長さが10cmほどで、頂端部に多くの枝が集まってつきます。葉は、茎葉が舌状で、枝葉が楕円形をしてくぼんでおり鱗状につきます。

本種は、北海道から九州、世界各地に広く分布し、県内では、平野地帯から亜高山帯の湿地及び湿原に生育しています。低地にある生育地では、近年宅地造成等による里山の開発が進んだことに加えて、園芸用材料として採取されていることから、産地、個体数共に減少しています。

ハイゴケ目ハイヒモゴケ科

キヨスミイトゴケ

Neodictyella flagellifera

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：横山 正弘)

(執筆：植物分科会)

丘陵地帯の沢沿いなど、空中湿度の高い場所のモミ等の樹幹や枝に着生し、垂れ下がって生育する蘚類です。

植物体は、鮮緑色をした絹状の光沢があり、分枝しながら細長く伸びて30cmほどに達します。葉は、枝や茎の基部に付く葉が大きく、垂れ下がる葉では小形で、ともに中央に達する中肋と葉細胞表面に1個の乳頭があります。

本種は、本州から沖縄、小笠原、中国、熱帯アジアに分布し、本県が分布の北限となっています。県内では、生育地が局限されており、森林内の乾燥化など生育環境の変化により、生育範囲及び個体数共に著しい減少が見られます。

(2) 維管束植物

デンジソウ科

デンジソウ

Marsilea quadrifolia

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：杉山 多喜子)

(執筆：植物分科会)

水田や池沼などの泥に根を下ろして群生する水生シダです。葉柄の先に、4枚の小葉が四葉のクローバーのように田の字形に見えるのでデンジソウ(田字草)という名前が付けられました。

栽培条件下での生育は確認されていましたが、50年ほど前の標本があるのみだったので、野生絶滅としていました。しかし2025年に仙北の水田で生育が再確認されたため、カテゴリーを変更しました。

北海道・本州・四国・九州の水田や池沼に分布しています。朝鮮・中国・ベトナム・ヨーロッパにも分布しています。

県内では仙北の水田の脇に少数生育しており、保全もされています。

ナヨシダ科

ウサギシダ

Gymnocarpium dryopteris

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：上野 雄規)

(執筆：植物分科会)

葉身は最下部の羽片が大きく3羽状に見えます。名前の由来は葉の柄の上部で脱落するが、その跡がウサギの口の形に見えることによると言われています。

生育地は数ヶ所で、特定の限られた立地にあります。生育地、個体数とも少ないです。

北海道・本州(岐阜県以北)に分布しています。ロシア・朝鮮・中国・西アジア・ヨーロッパ・北米にも分布しています。

奥羽山地の山地帯の特別な立地、風穴に僅かに生育しています。

サンショウモ科

サンショウモ

Salvinia natans

宮城県 準絶滅危惧 (NT)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-------------------	-------------------



(撮影：細谷 治夫)

(執筆：植物分科会)

水田、池沼、溜池の水面に浮かんで生育し、しばしば群生します。名前の由来はサンショウの木の葉に似ていることによります。

生育地は30ヶ所近くあるが、減少率の高い所が半数近くあります。環境悪化により生育地、個体数ともに激減しています。

本州・四国・九州(熊本県以北)に分布しています。ロシア・朝鮮・中国・台湾・インド・東南アジア・ヨーロッパにも分布しています。

県内では各地の湿地、湖沼、および水田に生育しているが、生育環境の変化で個体数は減少しています。

スイレン科

オニバス

Euryale ferox

宮城県 絶滅 (EX)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
----------------	--------------------



(撮影：生態 国京 潤一、撮影地：新潟県、標本 植物分科会調査員、東北大学植物園記念館所蔵)

(執筆：植物分科会)

池沼の水面に生育する1年草の巨大な水草で体表に刺があります。名前「鬼蓮」の由来はハスに似ていて刺があることによります。

水田地帯の数ヶ所の沼地に生育記録がありますが、埋め立てなどにより絶滅しました。仙台市若林区大沼の100年前の標本が残されています。

宮城県以南～九州の低地の池に分布しています。台湾・中国南部・インドにも分布しています。

仙台市の池沼で過去に確認されましたが、宮城県では絶滅しました。

ウマノスズクサ科

フタバアオイ

Asarum caulescens

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：上野 雄規)

(執筆：植物分科会)

山中の木陰に生える多年生草本で、名前の由来は茎から2本の葉を出すことによります。徳川家の紋章はこの葉の形に基づいたものだと言います。

本県は分布の北限です。生育地は2ヶ所で限定されています。園芸採取される恐れがあります。

本州～九州に分布しています。中国にも分布しています。

県南部の山地の林床に生育しますが、個体数は少ないです。

サトイモ科

ザゼンソウ

Symplocarpus renifolius

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：三島木 進)

(執筆：植物分科会)

谷間の湿地に生える大型の多年草で、悪臭を放ちます。「座禅草」と書き、花序の様子を座禅している僧に見立てて名前がつけられました。

生育地は数ヶ所と極めて限られ、生育地、個体数ともに少ないです。周辺の森林伐採や道路開発により絶滅が危惧されます。

北海道・本州に分布しています。朝鮮・樺太・ウスリー・アムールの水湿地にも分布しています。

県内では阿武隈山地の森林内湿地に生育しています。生育地、個体数共に少ないです。

トチカガミ科

トチカガミ

Hydrocharis dubia

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
--------------------	-------------------



(撮影：上野 雄規)

(執筆：植物分科会)

湖沼に生える多年生草本。名前の由来は「スッポンの鏡」で、トチはスッポン、鏡は葉が円形で艶があることによると言われます。

生育地は十数ヶ所と比較的多いのでランクを下げました。

本州～沖縄に分布しています。東南アジア～オーストラリアの温帯～熱帯にも分布しています。

河川、湖沼に生育しているが、生育地が限られています。東日本大震災の津波浸水域でも確認されています。湖沼の開発などにより減少が危惧されます。

トチカガミ科

ミズオオバコ

Ottelia alismoides

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
--------------------	-------------------



(撮影：細谷 治夫)

(執筆：植物分科会)

湖沼や溜池、水路、水田などに生育する一年生の沈水植物です。名前は「水オオバコ」で葉がオオバコに似ることによります。

生育地は60ヶ所以上と多いが、減少率の大きい場所が多いのでランクを上げました。水湿地は開発が危惧されます。

北海道～九州・沖縄に分布しています。アジアの熱帯～温帯域・オーストラリアにも分布しています。

各地の水湿地や水田等に局所的に生育しています。津波浸水域で一時的に増加しました。

アマモ科

タチアマモ

Zostera caulescens

宮城県 情報不足 (DD)	環境省 絶滅危惧II類 (VU)
------------------	---------------------



(撮影：標本 植物分科会調査員、東北大学植物園記念館所蔵)

(執筆：植物分科会)

水深3-17mの内海の海底の砂泥に生育する多年草で根茎は横に這う。葉は長さ60cmほどに伸長する。

生育地は数ヶ所で局限されています。

北海道・本州中部以北の海中に分布しています。朝鮮にも分布しています。

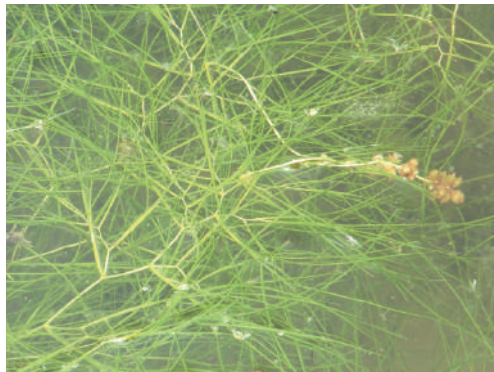
松島湾～三陸海岸の海水中の砂地に幼芽しています。東日本大震災の津波に遭遇し、生育地および個体数が減少、絶滅した生育地もあるものと思われる。

ヒルムシロ科

リュウノヒゲモ

Stuckenia pectinata

宮城県 絶滅危惧II類 (VU)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
---------------------	-------------------



(撮影：杉山 多喜子)

(執筆：植物分科会)

主に海岸近くの汽水域に生育している多年生の沈水植物で、茎はきわめて細く分岐しています。

生育地が30ヶ所以上と比較的多いのでランクを下げました。分布範囲は沿岸部に多いが、内陸部でも確認されています。

日本全土に分布しています。世界の温帯～熱帯にも分布しています。

主に沿岸の汽水域に生育していますが、水質汚染や埋め立てによって絶滅した所もあります。他の生育地も絶滅が危惧されます。津波浸水域でも確認されました。

ホンゴウソウ科

ホンゴウソウ

Sciaphila nana

宮城県 絶滅危惧I類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：細谷 治夫)

(執筆：植物分科会)

暗い林の落ち葉の間に生える多年生草本で、緑葉を欠き有機物を取り込んで生活している菌従属栄養植物です。

県内で1983年に採集されているが、その生育地のものは工事で絶滅したものと見られ、新たに生育地が数ヶ所発見されています。宮城県が北限です。

本州中部以南～沖縄に分布しています。東南アジアにも分布しています。

県内では最初に松島町で生育が確認され、その後仙台市、名取市、利府町の丘陵地の森林の林床で生育していることが確認されています。

ユリ科

ヒメサユリ

Lilium rubellum

宮城県 絶滅危惧I類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：上野 雄規)

(執筆：植物分科会)

山地から高山の草地まで広く分布し、美しいピンク色の花をつけるユリの仲間です。

本県の分布が太平洋側北限で生育地は数ヶ所とごく限られており、個体数も少ないです。

新潟県・福島県・山形県の県境付近と宮城県に分布しています。日本固有種。

県南部の奥羽山地に少数点存在しています。最近ではニホンザルがユリ根を採餌しているとのことで絶滅が危惧されます。地域で栽培保存しています。

ラン科

エビネ

Calanthe discolor

宮城県 絶滅危惧II類 (VU)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
---------------------	-------------------



(撮影：細谷 治夫)

(執筆：植物分科会)

山地や丘陵の林の下に生える多年草です。地下茎には節が多く、エビに似ているのでエビネの名がつけました。

生育地は30ヶ所以上で比較的多いが、減少率の高い所も多いです。園芸価値が高く、乱獲され個体数は激減しています。

北海道西南部～沖縄に分布しています。朝鮮(済州島)にも分布しています。

里山や山地の林床に広く分布しているが、乱獲が進み絶滅した所もあります。個体数も減少しています。

ラン科

クロヤツシロラン

Gastrodia pubilabiata

宮城県 絶滅危惧I類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：阿部 功之)

(執筆：植物分科会)

丘陵地の広葉樹林に稀に生育している緑葉を持たない菌従属栄養植物です。ヤツシロは九州の地名で花は黒っぽい色です。

本県が分布の北限です。生育地は1ヶ所で局限されており、個体数も少ないです。2022年に初めて生育が確認されました。

宮城県以南の本州・四国・九州に分布しています。

山元町で確認されています。

ラン科

クマガイソウ

Cypripedium japonicum

宮城県 絶滅危惧I類 (CR+EN)	環境省 絶滅危惧II類 (VU)
-----------------------	---------------------



(撮影：三島木 進)

(執筆：植物分科会)

山地の樹木の下や竹林の下に生える多年草。花の袋形の唇弁を武将熊谷直実の背負った母衣(ほろ)に見立て名付けられたと言われています。

生育地は20ヶ所近くありますが、減少率の高い生育地が多いです。園芸価値が高く、園芸採取で絶滅が危惧されます。

北海道西南部～九州に分布しています。朝鮮・中国にも分布しています。

山地に稀に生育し、個体数も少ないです。園芸植物として採取されるため、場所によっては絶滅しています。

ラン科

アキタスズムシソウ

Liparis longiracemosa

宮城県 絶滅危惧I類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：細谷 治夫)

(執筆：植物分科会)

山地の樹林下に生えるスズムシに似た花をつけるランの多年草です。2019年に新種記載されました。

生育地は1ヶ所でした。2021年と2023年に川崎町と仙台市青葉区で発見されました。個体数も少ないです。

北海道、本州、四国、九州に分布しています。日本固有種。

県内ではスズムシソウと同様、疎林の空中湿度が高い場所に生育していると思われます。分布は極稀です。

ラン科

カヤラン

Thrixspermum japonicum

宮城県 絶滅危惧II類(VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：杉山 多喜子)

(執筆：植物分科会)

常緑の針葉樹の樹幹上や岩上に着生する常緑の多年草です。

生育地は20ヶ所程度と限られ、園芸価値が高いです。個体数も激減しています。

岩手県以南の本州～四国・九州に分布しています。日本固有種。

丘陵地のモミなどの樹上に着生し、生育地は多くなく、個体数も少ないです。

メギ科

トガクシソウ

Ranzania japonica

宮城県 絶滅危惧I類(CR+EN)	環境省 準絶滅危惧(NT)
----------------------	------------------



(撮影：杉山 多喜子、撮影地：山形県)

(執筆：植物分科会)

深山の樹林下に生育する多年生草本。和名は長野県の戸隠山で初めて採集された。

生育地は数ヶ所で局限されています。園芸採取される恐れがあります。

本州中北部の多雪地に分布しています。日本固有種。

二口山塊と栗駒山の山地帯のブナ林の林床に生育しているが、個体数は少ないです。

フサザクラ科

フサザクラ

Euptelea polyandra

宮城県 要注目種	環境省 —
-------------	----------



(撮影：細谷 治夫)

(執筆：植物分科会)

高さ15mになる落葉高木で、早春3～4月房状の花をつけます。

本県は分布の太平洋側北限。生育地は20ヶ所程度ですが、自生は丸森町に限定されています。

本州・四国・九州に分布しています。日本固有種。

県南の阿武隈山地の谷筋に生育し、フサザクラ-タマアジサイ群集を形成しています。七ヶ宿町にも分布がみられます。

キンポウゲ科

フクジュソウ

Adonis ramosa

宮城県 絶滅危惧II類(VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：尾形 良太)

(執筆：植物分科会)

落葉樹林下に生える多年草で、花は3～4月に咲きます。「福寿草」で元日の飾り花として鉢植えに用いられます。

生育地は30ヶ所程度で、里山地域の開発が進み減少しています。また、園芸植物として乱獲されています。

北海道～九州に分布しています。朝鮮・中国東北部・シベリア東部にも分布しています。

各地の里山の林縁、畔などに生育していますが、生育地、個体数共に急激に減少しています。よく人家付近に植栽されます。

キンポウゲ科

イチリンソウ

Anemone nikoensis

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：三島木 進)

(執筆：植物分科会)

丘陵の木陰に生える多年草で、4月頃1個の大きい花をつけます。

本県が分布の北限。生育地は10ヶ所以上あるが、局限されています。園芸採取される危険性が高いです

本州～九州の暖帯上部～温帯に分布しています。日本固有種。

県南の限定された場所に生育していて、個体数も少ないです。

キンポウゲ科

シラネアオイ

Glaucidium palmatum

宮城県 準絶滅危惧 (NT)	環境省 —
-------------------	----------



(撮影：三島木 進)

(執筆：植物分科会)

山地の木陰に生える多年草で、6～7月に開花し、花は淡青紫色～淡紅色、稀に白色で大きく美しい。

生育地は50ヶ所程度であるが、花が目立つため園芸採取などで減少しています。

本州の中部地方の日本海側から北海道に分布しています。日本固有種。

奥羽山地のブナ林の林床に広く分布しているが、北上山地、阿武隈山地の標本はないです。

キンポウゲ科

カザグルマ

Clematis patens

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
--------------------	-------------------



(撮影：市ノ渡 彰)

(執筆：植物分科会)

平地や丘陵の林下、林縁に生育する多年草のつる植物です。

生育地は60ヶ所以上と多いが、里山地域の開発が進み減少率の高い所が多いです。また、園芸植物として乱獲されています。

本州・四国・九州北部に分布しています。朝鮮・中国東北部・南部にも分布しています。

各地の里山の林縁などに生育しているが、生育地、個体数共に急激に減少しています。庭にも植栽されています。

キンポウゲ科

ヒメキンポウゲ

Halerpestes kawakamii

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
-----------------------	--------------------



(撮影：杉山 多喜子)

(執筆：植物分科会)

海岸の湿地に生える多年草で、6～8月頃に黄色い花をつけます。

生育地は10ヶ所近く記録されているが、現在生育地は県内では確認されていません。

本州の青森県～千葉県・秋田県の海岸付近の湿地に分布しています。日本固有種。

海岸の砂地、湿地に生育し、個体数も少ないです。東日本大震災後、生育は確認されていません。

キンポウゲ科

ヒキノカサ

Ranunculus extorris

宮城県
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



(撮影：市ノ渡 彰)

(執筆：植物分科会)

河川敷の湿地に生える小形の多年草で、「蛙の傘」で花を蛙の小傘にたとえたものと言われます。

本県が分布の北限。局限された河川敷1ヶ所に生育しています。

宮城県・新潟県以南の本州～九州に分布しています。朝鮮(済州島)・中国・台湾にも分布しています。

登米市の河川敷のヨシ焼き後などの日当たりの良い湿地に生育しています。

ユキノシタ科

ムカゴネコノメソウ

Chrysosplenium maximowiczii

宮城県
要注目種

環境省
準絶滅危惧 (NT)



(撮影：国京 潤一)

(執筆：植物分科会)

谷沿いの林床に生育する多年草で、むかご(珠芽)を走出枝につけ増殖します。

本県が分布の北限です。生育地は20ヶ所以上ありますが、個体数は少ないです。

宮城県以南・関東・東海の本州に分布しています。日本固有種。

県南の阿武隈山地の谷沿いの林床に局限して生育しています。

キンポウゲ科

ヒメバイカモ

Ranunculus kadzusensis

宮城県
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省
絶滅危惧ⅠB類 (EN)



(撮影：市ノ渡 彰)

(執筆：植物分科会)

湖沼、溜池などに生育する多年草の沈水植物で、河川に生育する流水性のバイカモに比べて小さい。

宮城県が分布の北限。生育地は数ヶ所で、開発等で減少しました。本州・四国・九州に分布しています。朝鮮にも分布しています。

平地から丘陵地の水田、溜池などに生育し、個体数も少ないです。東日本大震災による津波で絶滅した所もあります。

マメ科

センダイハギ

Thermopsis fabacea

宮城県
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省
—



(撮影：杉山 多喜子)

(執筆：植物分科会)

海岸の礫地や砂地に生える多年草で、5月頃開花します。

生育地は20ヶ所以上ありましたが、東日本大震災による津波により絶滅した生育地や新たに増加した生育地もあります。

北海道・本州中部以北に分布しています。朝鮮・中国・ロシア極東・北アメリカ北部にも分布しています。

沿岸地域の海岸砂丘等に生育しています。生育地、個体数は少ないです。

クロウメモドキ科

ヨコグラノキ

Berchemiella berchemiifolia

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：上野 雄規)

(執筆：植物分科会)

高さ3~7mの落葉小高木で、和名は高知県横倉山で最初に採集されたことによります。

東北地方では数少ない分布で北限。生育地が2ヶ所で局限されています。生育面積、個体数共に僅かです。

本州・四国・九州の岩礫地に分布しています。朝鮮半島南部にも分布しているが希です。

1ヶ所は国指定天然記念物で保護され健在です。他所のものは絶滅寸前です。

アカバナ科

ウスゲヤナギラン

Chamaenerion angustifolium subsp. circumvagum

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：佐藤 泰雄)

(執筆：植物分科会)

日当たりの良い草地に生える多年草で、葉の形がヤナギに似てランのような花をつけることから名がつけられました。

生育地は1ヶ所で限定されており、個体数も少ないです。

北海道・本州中部以北に分布しています。ヨーロッパ・アジア・アメリカにも広く分布しています。

生育地は奥羽山地の草地で、個体数は極めて少ないです。森林伐採後や山火事後に発生することもあります。

ヤナギ科

シライヤナギ

Salix shiraii

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：三島木 進)

(執筆：植物分科会)

樹高が1m程度の落葉小高木で、花は4~5月頃つけます。

生育地は数ヶ所ありますが、広く分布し個体数も多くランクを下げました。

東北地方では数ヶ所の生育地が知られるのみです。

本州の東北地方南部から関東地方北西部に分布しています。日本固有種。

蔵王連峰の岩場の限られた場所に生育しています。かつて青根にも生育していましたが、道路工事で消滅しました。

サクランソウ科

ウミドリ

Lysimachia maritima var. obtusifolia

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：三島木 進)

(執筆：植物分科会)

海岸の湿地に生える多年草で、花は8~9月頃つけます。

北方系要素の植物として貴重です。生育地は10ヶ所近くで、個体数とも少ないです。

北海道・本州北部の海岸の湿地に分布しています。アジア・北アメリカ北部にも分布しています。

県内では海岸の塩性湿地に生育しています。東日本大震災の津波により消滅した場所もあります。一方沿岸の水田跡などに生育域を拡大拡大した所もありますが復旧工事で消滅しました。

サクラソウ科

サクラソウ

Primula sieboldii

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：細谷 治夫)

(執筆：植物分科会)

低地から高山まで生育している多年草で、花は4～5月頃開き、和名はサクラに似ているのでつけられました。合弁花で、離弁花のサクラとは程遠い。

生育地は数十ヶ所と限定されています。生育地や個体数は減少しています。

北海道南部・本州・九州に分布しています。朝鮮・中国東北部・シベリア東部にも分布しています。

平地から低山の沢筋や湿地に生育していますが、土地開発、園芸採取などにより激減しています。

シソ科

ハマゴウ

Vitex rotundifolia

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：杉山 多喜子)

(執筆：植物分科会)

海岸の砂浜や礫浜に生育している落葉の小低木で、夏頃芳香のある花を咲かせます。

現在生育地は1ヶ所であり、保護されています。カテゴリーを絶滅から変えました。

青森県以南の本州・四国・九州・小笠原・沖縄に分布しています。朝鮮・台湾・東南アジア・太平洋諸島・オーストラリアにも分布しています。

県内の生育地は牡鹿半島の島嶼、金華山だけでしたが、東日本大震災によって消失しました。震災後仙台市の海岸の砂浜で新たに確認されました。

ムラサキ科

ルリソウ

Nihon krameri

宮城県 準絶滅危惧 (NT)	環境省 —
-------------------	----------



(撮影：加藤 啓子)

(執筆：植物分科会)

丘陵の林内に生える多年草で、4～6月に瑠璃色(紫みを帯びた鮮やかな青色)の花が咲きます。

生育地は40ヶ所以上と比較的多いのですが、局所的であり、個体数も少ないです。

本州の東北地方から中部地方に分布しています。日本固有種。開発や採集により個体数が減少し続けています。

奥羽山地及び平野部の丘陵地の落葉広葉樹林下に生育しています。

ハマウツボ科

ナンバンギセル

Aeginetia indica

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：細谷 治夫)

(執筆：植物分科会)

普通ススキなどの根に寄生する葉緑体を持たない一年生の寄生植物で、夏に見事なピンクの花を咲かせます。

生育地は10ヶ所近くありますが、減少しています。

北海道から沖縄に分布しています。台湾・中国・インドネシア・マレーシア・インドにも分布しています。

県内では県北部では確認されていない。丘陵地の草地で生育が確認されています。

タヌキモ科

ミミカキグサ

Utricularia bifida

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：尾形 良太)

(執筆：植物分科会)

湿地に生える食虫植物で、地中に虫を捕らえるための袋をつけ、和名は果実と柄が「耳かき」に似ることによります。

生育地は10ヶ所以上あるが、池沼の改修やダム建設によって生育地、個体数共に激減してきました。

本州～沖縄に分布しています。中国・インド～マレーシア・オーストラリアの湿地にも分布しています。

平野部から丘陵地の湿地に生育していましたが、極めて少なくなり、山地の湿地に僅かに残っています。

キキョウ科

ムラサキセンブリ

Swertia pseudochinensis

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：八巻 克己)

(執筆：植物分科会)

丘陵の草地に生えるセンブリの仲間、背丈が大きく紫色の花を夏つけます。

生育地は1ヶ所で、2020年県内で初めて確認されました。個体数も少ないです

関東以西の本州から九州に分布しています。朝鮮・中国・ロシア東部にも分布しています。

白石市の日当たりのよい草地で生育が確認されています。

モチノキ科

ソヨゴ

Ilexpedunculosa

宮城県 準絶滅危惧 (NT)	環境省 —
-------------------	----------



(撮影：滝口 政彦)

(執筆：植物分科会)

高さ3～7mの常緑広葉樹で、花は6～7月頃つけます。

本県が分布の北限。生育地は10ヶ所程度で局限されています。生育地も個体数も少ないです

宮城県以南の本州・四国・九州に分布しています。台湾・中国にも分布しています。

仙台市の丘陵地のコナラ林内に生育しています。生育地も個体数も少ないです。

ミツガシワ科

ヒメシロアサザ

Nymphoides coreana

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
--------------------	--------------------



(撮影：杉山 多喜子)

(執筆：植物分科会)

湖沼や溜池、水田に生育する浮葉植物で、夏に白い小さな花をつけます。

生育地は30ヶ所近くと限られており、個体数も減少しています。

本州～九州・石垣島・西表島に分布しています。朝鮮・中国にも分布しています。

平野部の湖沼、水田に広く生育し、水質悪化で減少が懸念されます。東日本大震災の津波浸水域で一時的に増加しました。

キク科

アズマギク

Erigeron thunbergii

宮城県 絶滅危惧II類(VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：三島木 進)

(執筆：植物分科会)

平地から山地の日当たりの良い草原に生える多年草で、5~6月頃薄紅紫色の花を咲かせます。

生育地は50ヶ所程度です。草原など生育環境が減少し、個体数が急激に減少しています。

本州の中部以北に分布していません。日本固有種。

日当たりの良い草原に群生しているが、草原が放置され自然遷移が進行し、樹木の植林が行われたりして、生育地、個体数とも激減しています。

スイカズラ科

マツムシソウ

Scabiosa japonica

宮城県 絶滅危惧II類(VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：三島木 進)

(執筆：植物分科会)

山地の明るい草地に生育する2年草、秋に紫色の花を咲かせます。

生育地が20ヶ所近くありますが草原が少なくなり、生育地・個体数共に減少しています。

本州の青森県から九州に分布しています。日本固有種。

かつては奥羽山地、北上山地、阿武隈山地の草地に群生、現在は奥羽山地のみで確認されています。

4 動物編 (1) 哺乳類

霊長目オナガザル科

ニホンザル(金華山島のニホンザル)

Macaca fuscata

宮城県 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)	環境省 絶滅のおそれのある地域個体群(LP)
---------------------------	---------------------------



(撮影：辻 大和)

(執筆：哺乳類分科会)

太平洋上の金華山島(石巻市)には、6群約250頭のニホンザルの自然群が生息しています。本土のニホンザルと交流のない孤立個体群として、長期に渡りその自然な生態が研究されています。

海岸で海藻や貝類を採食する珍しい姿で知られますが、本来はブナやコナラ等の木本類の堅果や果実、葉などが重要な食物です。

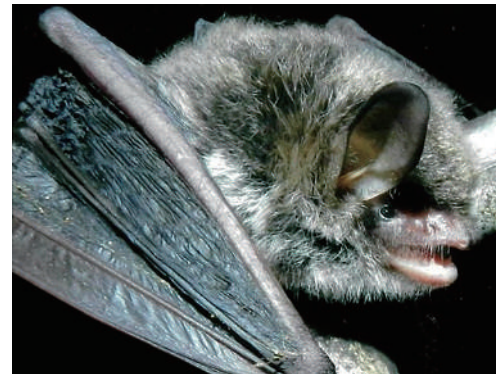
同島では高密度のニホンジカによって天然林の更新が阻害され、草草が拡大。生息環境の質の劣化が進行しています。森林の保全は緊急の課題です。

翼手目ヒナコウモリ科

ノレンコウモリ

Myotis bombinus

宮城県 絶滅危惧I類(CR+EN)	環境省 絶滅危惧II類(VU)
----------------------	--------------------



(撮影：高橋 修)

(執筆：哺乳類分科会)

体重5-10g程度の小型のコウモリ。北東アジア地域に分布するとされ、国内では北海道、本州、四国、九州で確認されています。しかし、いずれの地域でも事例・個体数はたいへん少なく、未知の点が多い種類です。自然度の高い森林で生活すること、洞穴性であること、夏季に出産保育集団を形成することがわかっています。

県内では2014年と2023年に鳴瀬川流域の横穴で、2023年には栗原市花山峠の林内で、偶発的に確認されていますが、繁殖の有無などは不明です。生息適地は極めて限定的であると考えられます。

翼手目ヒナコウモリ科

モリアブラコウモリ

Pipistrellus endoi

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
-----------------------	--------------------



(撮影：高橋 修)

(執筆：哺乳類分科会)

日本固有種。本州・四国で確認されていますが、事例が少なく見の少ない小型のコウモリです(体重5-9g)。近縁種アブラコウモリが平野部に広く生息するのは対照的に、モリアブラコウモリは自然度の高い天然林に生息し、日中はブナ・スギの樹洞等をねぐらにしています。生息地は断片的で、減少傾向にあるとされています。生態や生活史はよく知られていません。

東松島市宮戸島では、本種ではたいへん稀な越冬中の個体が観察されていることから、生息地域として保全上の重要性が高いと考えられています。

鯨目コククジラ科

コククジラ

Eschrichtius robustus

宮城県 情報不足 (DD)	環境省 —
------------------	----------



(著者の許可を得て Kato et al. 2006 から転載)

(執筆：哺乳類分科会)

コククジラは、主に沿岸で底生生物を採餌する小型のヒゲクジラです(体長12-15m)。かつて捕鯨の対象となり、北大西洋では18世紀に絶滅。現在は、北部太平洋のアメリカ側に東系群、アジア側に西系群が分布しているとされています。このうち日本で見られる西系個体群は極めて少数で、IWCは2023年の個体数を222頭と推定しています。

宮城県内でも20世紀には姿を消していましたが、2005年に親子と見られる2頭が定置網で混獲されました。今後の情報の蓄積を見守る必要があります。

食肉目イタチ科

ラッコ

Enhydra lutris

宮城県 情報不足 (DD)	環境省 絶滅危惧ⅠA類 (CR)
------------------	---------------------



(撮影：佐藤 賢二)

(執筆：哺乳類分科会)

ラッコ(体長1.0-1.5m)はイタチ科の中では最も大きく、海棲哺乳類の中では最も小さな種です。太平洋北部の沿岸に分布し、日本では北海道東部沿岸に生息します。動物の中で世界一高密度の毛皮を持つことから18世紀以降乱獲され、絶滅の危機に陥りました。現在では各国で保護の対象となっています。日本でも一時期姿を消しましたが、近年、北海道で少数が確認されるようになってきました。

宮城県では2008年に女川町笠貝島・足島、2016年に足島で、1頭のラッコが泳いだり岩礁に上陸したりする姿が確認されました。

鯨目ネズミイルカ科

スナメリ(仙台湾—東京湾系群)

Neophocaena asiaorientalis

宮城県 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)	環境省 —
----------------------------	----------



(撮影：仙台湾の杜水族館)

(執筆：哺乳類分科会)

スナメリは日本、中国、台湾、韓国に分布する体長2mほどの小さなハクジラ(イルカ)で、沿岸の浅海に生息しています。宮城県はスナメリの分布の北限にあたります。

日本のスナメリは地理的・遺伝的に5つの地域個体群に分かれ、宮城県沿岸に生息する「仙台湾—東京湾系群」の個体数は2012年に1491頭と推定されています。県内で目撃・漂着・混獲が確認されており、東日本大震災のさいには妊娠個体が仙台市内に漂着するなど、沿岸で繁殖していると考えられます。

(2) 鳥類

カモ目カモ科

コクガン

Branta bernicla

宮城県
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



(撮影：村上 良真)

全長61cm、小型のガンの1種で、全身は黒っぽく、下腹部は白色です。喉に白い網目模様があります。国の天然記念物に指定されており、岩磯、養殖海域や浅海で海藻やアマモなどを採食します。

冬鳥として渡来し、宮城県は比較的大きな群れの定期的な越冬地の南限になっています。気仙沼湾から牡鹿半島にいたる南三陸沿岸および仙台市蒲生海岸に渡来します。採食場以外の重要な生息地要因として、河口や砂浜などの安全な淡水の飲水場、上陸しての休息地がありますが、これらの場所は人の影響を受けやすい所です。

(執筆：鳥類分科会)

カモ目カモ科

カリガネ

Anser erythropus

宮城県
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省
絶滅危惧ⅠB類 (EN)



(撮影：瓜生 篤)

全長59cm、小型のガンでマガンによく似ていますが嘴はピンク色で短く、目の周りに黄色のリングがあります。

冬鳥として宮城県北部平野部に毎年少数が渡来します。登米市迫町北方に定期的に渡来しますが伊豆沼、蕪栗沼周辺で他のガン類に数羽が混じっているなど、小さな群れも観察されます。渡来数は300羽程度です。カリガネを始めガン類の生息には休息に適した安全な場所と採食に適した広い農耕地や草地、湿草地を必要とします。また高病原性インフルエンザの集団感染などが心配されています。

(執筆：鳥類分科会)

カモ目カモ科

亜種ヒシクイ

Anser fabalis serrastris

宮城県
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

環境省
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



(撮影：瓜生 篤)

全長85cm、中型のガンで、嘴の前方が黄色で先端の黒点特徴です。国の天然記念物に指定されています。冬鳥として渡来し、湖沼や河川をめぐらし、周辺の農耕地で採食します。

宮城県の亜種ヒシクイの渡来数は亜種オオヒシクイの1/4程度で、ほとんどが伊豆沼、蕪栗沼、化女沼をめぐらしています。亜種ヒシクイを始めガン類の生息には休息に適した安全な場所と採食に適した広い農耕地や草地、湿草地を必要とします。また高病原性インフルエンザの集団感染などが心配されています。

(執筆：鳥類分科会)

キジ目キジ科

ウズラ

Coturnix japonica

宮城県
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

環境省
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)



(撮影：瓜生 篤)

全長20cm、小型の鳥で、全身茶褐色に黄白色の斑があり、人が近づいたりして危険を感じると草かげにはいたり、地面に伏せたりして目立ちにくい鳥です。

東アジアに分布し、留鳥や夏鳥として全国の平地から山地の草地や農耕地などに生息します。宮城県の生息数は著しく減少したままで、近年は春と秋の移動の時期だけ観察されています。狩猟鳥指定から外れたものの一度個体数が少なくなると回復には時間がかかります。また農地の整備が進み、草地が少なくなり生息環境が悪化していることも減少の一要因です。

(執筆：鳥類分科会)

ヨタカ目ヨタカ科

ヨタカ

Caprimulgus jotaka

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
--------------------	-------------------



(撮影：深瀬 徹)

全長29cm。全身の羽衣は暗褐色や褐色で、黒褐色や褐色、薄灰色などの複雑な斑紋が入り、樹上や落葉の上では目立ちにくい鳥です。夏鳥として平地から山地の疎林、森林の伐採地などに生息し、地上で営巣します。移動の時期は平地の林地や公園でも観察されます。

宮城県内でも夏鳥として各地の山地の疎林、伐採地などに生息しています。人工林の成長にともない低山では見られなくなった所が多いのですが、山地の伐採跡地に散在して記録があります。疎林を好むため密生した人工林の増加により生息環境が悪化しています。

(執筆：鳥類分科会)

チドリ目カモメ科

コアジサシ

Sternula albifrons

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
--------------------	--------------------



(撮影：本田 敏夫)

全長28cm。上面は灰色で頭部は黒、腹部は白く、嘴は黄色です。夏鳥として本州以南に渡来します。群れで行動し、砂浜、埋立地など植被の少ない開けた場所に集団で営巣します。太平洋側は宮城県以南、日本海側は秋田県以南でほぼ毎年繁殖が記録されています。

宮城県では仙台市蒲生海岸や亘理町吉田海岸などで繁殖していますが、巣立ち数は1~3羽ととても少ない状況です。営巣地への人の侵入により脅威を与えています。また県内の砂浜海岸は草地化により繁殖に適した生息地が縮小しており、繁殖の継続が危惧されます。

(執筆：鳥類分科会)

チドリ目チドリ科

イカルチドリ

Charadrius placidus

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：本田 敏夫)

全長20.5cm。嘴が長めのチドリです。九州以北に留鳥として分布し、北海道では夏鳥です。砂礫地のある河川、湖沼、水田に生息します。

宮城県でも留鳥として、繁殖期は河川の中流から上流域の砂利河原に生息します。非繁殖期は河川や湖沼の露出した泥地や水田のほか、南三陸地方では漁港でも観察されます。河川の流量低下に伴い、繁殖に適した砂礫地が少なくなり、さらに草地化も進み、営巣環境の悪化が懸念されます。また、営巣地への人の侵入により卵や雛への直接の影響も危惧されます。

(執筆：鳥類分科会)

チドリ目ウミスズメ科

ウトウ

Cerorhinca monocerata

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：村上 良真)

全長37.5cm。オレンジ色の嘴で、上嘴の基部にツノ状の突起があり、頭から上面は灰黒色で、腹は白い海鳥です。留鳥として島嶼で繁殖し、繁殖期の日中は海上で生活し、夜間繁殖地に戻ります。潜水してイカナゴやイワシなどの小魚を捕食します。

宮城県でも留鳥として牡鹿半島から北の沿岸海上で見られます。女川町足島は集団繁殖地の南限です。潜って魚を獲るので、巻き網や刺し網による事故が危惧されます。さらに海水温上昇により、繁殖時期の魚種や分布の変化など、食物の量の減少が繁殖に大きく影響しています。

(執筆：鳥類分科会)

ペリカン目サギ科

ミゾゴイ

Gorsachius goisagi

宮城県 絶滅危惧II類 (VU)	環境省 絶滅危惧II類 (VU)
---------------------	---------------------



(撮影：竹丸 勝朗)

(執筆：鳥類分科会)

全長49cm。体上面の羽衣は赤褐色、下面はクリーム色で黒い縦縞が入ります。繁殖地として知られているのは日本だけであり、個体数も少ない鳥です。夏鳥として丘陵から山地の林に生息します。

宮城県でも夏鳥として丘陵から低山の林に生息していますが、個体数は少なく、夜行性で目立ちにくさから観察記録は少ない状況です。繁殖期に数ヶ所で観察されていますが丘陵および低山における林地の開発により生息可能な環境が減少しています。特に太陽光発電事業による大規模な造成開発が脅威となっています。

タカ目タカ科

クマタカ

Nisaetus nipalensis

宮城県 絶滅危惧II類 (VU)	環境省 絶滅危惧I B類 (EN)
---------------------	----------------------



(撮影：本田 敏夫)

(執筆：鳥類分科会)

全長は雄72cm、雌80cm。飛ぶと幅広く後縁がふくらんだ翼が特徴です。山地の森林における生態系の頂点に立つ種で大木に営巣します。国内希少野生動物種に指定されています。

宮城県では留鳥として奥羽山系および北上山系の山地およびそこから派生する丘陵地で繁殖しています。本県はもとも山地の面積が少なく、テリトリーが広いクマタカの個体数は多くはありません。森林伐採による繁殖環境の消失や植林による広葉樹から針葉樹への林相の変化による食物の減少が懸念されます。

タカ目タカ科

イヌワシ

Aquila chrysaetos

宮城県 絶滅危惧I類 (CR+EN)	環境省 絶滅危惧I B類 (EN)
-----------------------	----------------------



(撮影：加藤 敬一)

(執筆：鳥類分科会)

全長は雄81cm、雌89cm。全体が黒褐色ですが、幼鳥は飛翔中に翼と尾の基部に白色部が出るのが特徴です。山地の生態系の頂点に立つ種で、国の天然記念物、国内希少野生動物種に指定されています。

宮城県では留鳥として奥羽山系および北上山系の山地で見られますが個体数はごく少数です。近年、北上山系で繁殖の記録がなく、奥羽山系でも繁殖が不明になっています。多くは岩棚に営巣し、開けた場所で獲物を狩ります。植林によって広葉樹から針葉樹へ林相が変化し、獲物が減少することにより繁殖成功率はとても低い状況です。

タカ目タカ科

オオワシ

Haliaeetus pelagicus

宮城県 絶滅危惧II類 (VU)	環境省 絶滅危惧II類 (VU)
---------------------	---------------------



(撮影：瓜生 篤)

(執筆：鳥類分科会)

全長は雄88cm、雌102cm。成鳥は黄色い大きな嘴と白い肩羽、くさび状の白い尾が特徴です。繁殖地はオホーツク海沿岸に限られ、世界的に個体数が少ない種です。国の天然記念物、国内希少野生動物種に指定されています。

宮城県は定期的な越冬地の太平洋側の南限になっており、11月下旬から3月にかけて観察されます。魚類を主な食物とするため、主に松島湾より北の海岸沿いにかけてと伊豆沼などの平野部内陸湖沼でも見られます。薬品や有害物質で汚染された魚類を摂取することによる影響が懸念されます。

タカ目タカ科

サンバ

Butastur indicus

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
--------------------	--------------------



(撮影：本田 敏夫)

(執筆：鳥類分科会)

全長49cm。体の背面は赤みのある暗褐色で、腹部は白地に褐色の横斑があり、雌は白い眉斑があります。夏鳥として標高1000m以下の山地、丘陵、平野の水田が林に入り込んだいわゆる里山環境でよく観察され、水辺で小動物を食物としています。生息数は減少傾向にあります。

宮城県では4月上旬から見られ、県内全域で記録されています。農地整備が丘陵農耕地まで行われており、乾田化と水路もコンクリート製となり、食物動物が減少しています。また山間部の放棄された水田が樹林化することにより採食環境の悪化が懸念されます。

スズメ目ツバメ科

コシアカツバメ

Cecropis daurica

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：嶋 孝弘)

(執筆：鳥類分科会)

全長18.5cm。上面は光沢がある黒い羽毛で、腰がオレンジ色のツバメです。北海道から九州まで渡来し、建物の軒下に泥でとっくり型の巣を作ります。近年、分布が縮小し、局所的となっており、北海道や東北から姿を消しています。

宮城県でも夏鳥として市街地で見られましたが分布は局所的で、その後渡来数は著しく減少し、繁殖記録が途絶えました。2021年に利府町で生息が観察され、少数ですが2022年から継続した繁殖が確認されました。生息地が市街地や住宅地ということもあり、人との共存が重要です。

フクロウ目フクロウ科

アオバズク

Ninox japonica

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：竹丸 勝朗)

(執筆：鳥類分科会)

全長29cm。小型のフクロウで耳羽はなく、夜間にホッポー、ホッポーと続けて鳴くのが特徴で、薄暮時に昆虫などを捕食します。

宮城県では夏鳥として5月から10月に平地の市街地から丘陵にかけて神社やお寺、公園など太い木が残るところで観察されます。営巣木となる樹洞のある大径木が少なくなり、繁殖環境が悪化しています。また、農薬によって、食物となる昆虫類の減少や汚染された食物の摂取による体内蓄積が懸念されます。さらにカメラマンによる営巣木への接近や長時間にわたる滞在や追いまわしが直接の脅威となっています。

スズメ目イワヒバリ科

イワヒバリ

Prunella collaris

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 —
-----------------------	----------



(撮影：小室 智幸)

(執筆：鳥類分科会)

全長18cm。頭が灰色で体が茶褐色の小鳥です。本州北部および中部の高山の岩場や草地で繁殖します。岩の上で観察されることが多く、人に対する警戒心は非常に少ない鳥です。

宮城県では留鳥として南蔵王および中央蔵王で生息の記録がありますが、繁殖地は刈田岳から熊野岳にいたる馬の背のみであり、生息数は数羽程度です。また繁殖地一帯は観光地であり、営巣場所に不用意に近づくと繁殖放棄など直接の脅威となります。また、自然界の捕食者であるキツネが繁殖地に出没しており、その影響が懸念されます。

(3)両生類・爬虫類

有尾目サンショウウオ科

トウホクサンショウウオ

Hynobius lichenatus

宮城県 準絶滅危惧 (NT)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-------------------	-------------------



(撮影：太田 宏)

県内全域の丘陵から1000m程の山地に生息しています。早春、水たまりや流れの緩い沢に産卵します。水温が高い湧水池では厳冬期に産卵することもあります。普通、秋までには変態して、その後は林床で生活します。リター層あるいはその下の地中まで潜っていることも多く、繁殖期以外に成体を見つけるのは困難です。

平野部に近い所では、都市開発などで既に個体群が絶滅してしまっています。今後も土地の改変で生息地が失われる可能性が高いと考えられます。なお、センザンサンショウウオ (*Hynobius senzanensis*) として報告されているものは本種に含まれます。

(執筆：太田 宏)

カメ目ウミガメ科

アカウミガメ

Caretta caretta

宮城県 絶滅危惧 I B類 (EN)	環境省 絶滅危惧 I B類 (EN)
-----------------------	-----------------------



(撮影：仙台うみの杜水族館)

国内での主な産卵地は琉球列島から関東地方の太平洋岸とされています。本県でも散発的に海岸に死骸が打ち上げられているのが報告されていますので、宮城県の沿岸部を恒常的に回遊していると考えられています。加えて、県の南部で産卵が報告されていますので、本種の産卵地の北限が本県である可能性があります。

海洋汚染などの世界規模の環境破壊や、護岸工事による産卵地の破壊、漁業による混獲、卵も含めた食用の捕獲、プラスチック製品の誤食による死亡などにより世界的に減少していて、絶滅が危惧されています。

(執筆：太田 宏)

無尾目アカガエル科

トノサマガエル

Pelophylax nigromaculatus

宮城県 絶滅危惧 II 類 (VU)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：太田 宏)

一般には平地から低山の池沼や水田環境に生息していますが、仙台平野には分布していません。県内で確認されている生息地は山形県に近い限られた場所のみなので、絶滅の危機にあります。

トウキョウダルマガエルと良く似ていて外見上見分けが困難です。本種の方が体長に比べて手足が長いとされていますが、両者の変異が大きく、それだけで簡単には区別しにくいこともあります。

山間地の水田の耕作放棄によって、生息環境そのものが失われる可能性があります。

(執筆：太田 宏)

有鱗目トカゲ科

ヒガシニホントカゲ

Plestiodon finitimus

宮城県 情報不足 (DD)	環境省 —
------------------	----------



(撮影：菊池 彰人)

県内全域の平野部から低い山地にかけて生息していると考えられます。昼行性で人里にも住むはずなのにニホンカナヘビに比べて目撃情報は少数です。住宅敷地内の舗装化や石垣の減少など、これまで人間と共存できていた生息環境の変化が原因かもしれません。

ニホンカナヘビと間違われることもあります。本種の方がずんぐりとして、体表はすべすべした印象があります。

平野部では人間の住宅環境の変化、山地では種々の開発行為による生息地の攪乱により、生息数を減らす恐れがあると考えられます。

(執筆：太田 宏)

(4) 汽水・淡水魚類

コイ目コイ科

キンブナ

Carassius buergeri subsp.2

宮城県 絶滅危惧ⅠB類 (EN)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
---------------------	--------------------



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

関東地方から東北地方にかけての太平洋側に分布しています。かつては県内の広域に生息していたと考えられますが、平野部ではほとんど見られなくなりました。丘陵地の農業水路や溜め池などに、生息地が残っています。

体色は金色味を帯びており、他のフナ類と比較して小型で体高が低く、背鰭基底部の長さが短いのが特徴です。繁殖期には鰓蓋に、追星と呼ばれる粒状の突起が生じます。

河川、農業水路、溜め池などの改修による生息環境の悪化などが、生息状況悪化の要因となります。

コイ目コイ科

タナゴ

Acheilognathus melanogaster

宮城県 絶滅危惧ⅠB類 (EN)	環境省 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
---------------------	---------------------



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

神奈川県以北の本州太平洋側に分布していますが、絶滅した地域も多くあります。県内の生息地の大部分は農業水路や溜め池ですが、中規模以上の河川にも生息しています。

タナゴ類の中では体高が低く、口髭は短く、体側に青い縦帯があります。また、繁殖期には雄の臀鰭の下縁部が白色になります。カラスガイ族などの二枚貝に産卵します。

農業水路、溜め池の改修による生息環境の悪化や、オオクチバスによる捕食、外来タナゴ類との競争、産卵母貝の減少、愛好家による採集などが、生息状況悪化の要因となります。

コイ目コイ科

テツギョ

Carassius buergeri × *C. auratus*

宮城県 要注目種	環境省 —
-------------	----------



(撮影：坂本 順一)

(執筆：坂本 順一・旗 薫)

県内では山間部の湖沼に生息地があるほか、各地の河川や溜め池、ダム湖などで偶発的に出現する場合があります。「魚取沼テツギョ生息地」は昭和8年に国指定文化財の天然記念物に指定されています。

魚取沼には尾の長いテツギョ型と尾の短いフナ型が生息し、朱色や白色、紅白模様の個体も確認されています。近年の遺伝子解析により、テツギョはフナ属とキンギョの交雑を起源とする事が明らかになりました。

伝染病による大量死や、愛好家による採集などが、生息状況悪化の要因となります。

コイ目コイ科

アカヒレタビラ

Acheilognathus tabira erythropterus

宮城県 絶滅危惧ⅠA類 (CR)	環境省 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
---------------------	---------------------



(撮影：旗 薫)

(執筆：坂本 順一・旗 薫)

岩手県から関東地方にかけての本州太平洋側に分布していましたが、東京都、埼玉県、群馬県では既に絶滅しました。県内に残る生息地も数カ所のみです。

口髭は短く、体側に青い縦帯があります。また、繁殖期には雄の背鰭、臀鰭が赤色になります。イシガイ、マツカサガイなどの二枚貝に産卵します。

農業水路、溜め池の改修による生息環境の悪化や、オオクチバスによる捕食、外来タナゴ類との競争、産卵母貝の減少、愛好家による採集などが、生息状況悪化の要因となります。

コイ目コイ科

ゼニタナゴ

Acheilognathus typus

宮城県 絶滅危惧ⅠA類 (CR)	環境省 絶滅危惧ⅠA類 (CR)
---------------------	---------------------



(撮影：坂本 順一)

(執筆：坂本 順一・旗 薫)

青森県を除く東北地方、関東地方、新潟県に分布していましたが、現在生息が確認されているのは秋田県、岩手県、宮城県、福島県のみです。県内の生息地は数カ所に限られ、保全活動によりかろうじて生息が維持されている状況です。

鱗が細かく口髭はありません。繁殖期は秋季で、カラスガイ族などの二枚貝に産卵します。

農業水路、溜め池の改修による生息環境の悪化や、オオクチバスによる捕食、外来タナゴ類との競争、産卵母貝の減少、愛好家による採集などが、生息状況悪化の要因となります。

コイ目コイ科

シナイモツゴ

Pseudorasbora pumila

宮城県 絶滅危惧ⅠA類 (CR)	環境省 絶滅危惧ⅠA類 (CR)
---------------------	---------------------



(撮影：旗 薫)

(執筆：坂本 順一・旗 薫)

関東地方では既に絶滅しており、現在は東北地方、新潟県、長野県のみ分布しています。かつては県内各地に生息していたと考えられますが、現存する生息地はわずかです。

側線が不完全で胸鰭上方までしか達しないことで、近縁の国内外来種であるモツゴと区別できません。

溜め池の改修による生息環境の悪化や、オオクチバスによる捕食、国内外来種モツゴとの競争・交雑、愛好家による採集などが、生息状況悪化の要因となります。

コイ目コイ科

エゾウグイ

Pseudaspius sachalinensis

宮城県 絶滅危惧ⅠB類 (EN)	環境省 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) (東北地方)
---------------------	-----------------------------------



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

北海道、新潟県以北の本州日本海側、福島県以北の本州太平洋側に分布します。県内の生息河川は数河川のみです。

臀鰭の外縁が直線状で、朱色の婚姻色が頬部にみに発現すること、繁殖期に雌の吻が伸長することで、他のウグイ属と区別できます。日中は淵などの深場に潜んでいるため、生息密度が低い河川では確認が容易ではありません。

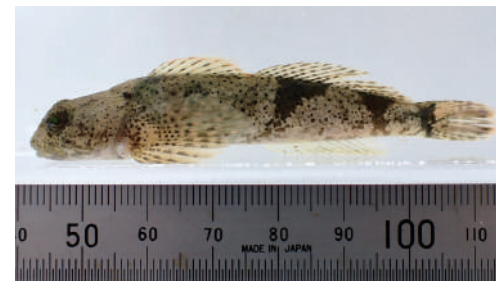
河川改修、林道や砂防堰堤の造成による生息環境の悪化や、出水による生息地の攪乱などが、生息状況悪化の要因となります。

スズキ目カジカ科

ウツセミカジカ

Cottus reinii

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
--------------------	---------------------



(撮影：阿部 拓三)

(執筆：阿部 拓三)

青森県から茨城県、静岡県から和山県、愛媛県を除く四国、琵琶湖周辺の河川に分布します。県内では南三陸地域の中小河川に生息し、石礫底の中下流域で見られます。

胸鰭軟条数が13~17本と多いことで、近縁種のカジカと区別できます。

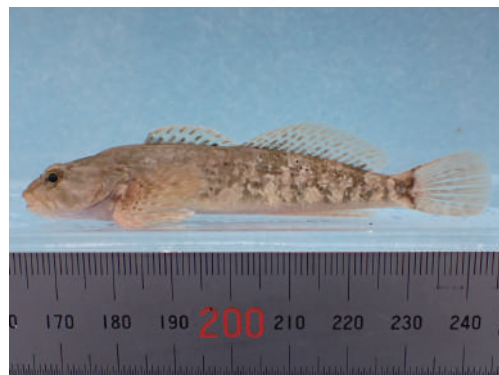
川と海を行き来する両側回遊魚であるため、河川の連続性の確保が重要であり、落差工による流路遮断や取水による流量減少、河口閉塞などが脅威となります。また、生息域が中下流域であるため、汚水流入の影についても注視していく必要があります。

スズキ目カジカ科

ハナカジカ

Cottus nozawae

宮城県 絶滅危惧ⅠB類 (EN)	環境省 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) (東北地方)
---------------------	-----------------------------------



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

北海道、新潟県以北の本州日本海側、宮城県以北の本州太平洋側に分布します。県内には遺伝的に異なる2系統が存在しますが、いずれも分布は局所的で、個体群も小規模です。

胸鰭上部の軟条が分岐し、腹鰭に縞模様があることでカジカと区別できます。生息地の大半はカジカの生息地より上流の緩勾配な支沢にあり、多くの場合、これらは砂防堰堤などによって隔てられています。

河川改修、林道や砂防堰堤の造成による生息環境の悪化や、出水による生息地の攪乱などが、生息状況悪化の要因となります。

スズキ目ハゼ科

ルリヨシノボリ

Rhinogobius mizunoi

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：旗 薫)

(執筆：旗 薫)

北海道、本州、四国、九州に分布しており、県内では牡鹿半島以北の中小河川で見られますが、その大部分で生息環境が悪化しています。

河川で孵化し降海した後、再び河川へ遡上し成長する両側回遊魚です。頬にルリ色の点が散在し、尾鰭基底部の斑が八の字状であることで、他のヨシノボリ属と区別できます。

河口閉塞や河川横断工作物による移動障害、河川改修、林道や砂防堰堤の造成による生息環境の悪化、出水による生息地の攪乱などが、生息状況悪化の要因となります。

スズキ目ハゼ科

マサゴハゼ

Pseudogobius masago

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
--------------------	--------------------



(撮影：赤池 貴大)

(執筆：赤池 貴大)

東日本大震災以前の宮城県内では蒲生干潟、井戸浦、広浦、鳥の海で確認されていました。いずれの生息地も東日本大震災に伴う津波による攪乱の影響を受けましたが、現在では多くの生息地で個体数が回復傾向にあります。また、近年になって新たに北上運河、松島湾、東谷地においても生息が確認されました。

干潟や河口域の泥底に生息する小型のハゼ科魚類で、全長は3cmほどです。体は円筒形で吻が丸く、第1背鰭には黒色斑がありません。

干潟の改修・埋め立てによる生息地の改変、汚染水による水質の悪化が、生息状況悪化の要因となります。

スズキ目ハゼ科

エドハゼ

Gymnogobius macrognathos

宮城県 絶滅危惧ⅠB類 (EN)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
---------------------	--------------------



(撮影：赤池 貴大)

(執筆：赤池 貴大)

東日本大震災に伴う津波により、宮城県内の一部の生息地が消失しました。現在では北上川河口域、松島湾、仙台湾に流入する河川の河口域周辺で確認されています。

干潟や河川の河口域の砂泥底に生息する小型のハゼ科魚類で、全長は4~6cmほどです。スナモグリ類やアナジャコ類の巣穴を生息場所や産卵場所として利用します。チクゼンハゼとよく似ていますが、下顎腹面に肉質突起があること、体側の斑紋が不明瞭であることで識別されます。

干潟の改修・埋め立てによる生息地の改変、汚染水による水質の悪化が、生息状況悪化の要因となります。

トンボ目アオイトトンボ科

コバネアオイトトンボ

Lestes japonicus

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
-----------------------	---------------------



(撮影：牧野 周、撮影地：仙台市太白区)

全長4cm程度のイトトンボで、緑色の金属光沢のある種です。類似する近縁種が存在しますが、本種は成熟しても胸部に白粉を生じません。6月から10月に見られます。

県内では伊豆沼・内沼などの平地と海岸線沿いの池沼や湿地帯を中心に10か所の産地がありましたが、現在では2か所で生息が確認されているのみです。農業排水による富栄養化が原因の一つと考えられています。

震災後、海岸線沿いの湿地帯で多数発生しましたが、巨大堤防と防潮林再生工事で、絶滅してしまいました。保護策は講じられませんでした。

(執筆：牧野 周)

トンボ目イトトンボ科

カラカネイトトンボ

Nehalennia speciosa

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：牧野 周、撮影地：加美町)

全長2.7 cm程度の小さなイトトンボで、胸部や腹部に金属光沢のある美しい種です。6月中旬から7月下旬にかけて見られます。北海道から北関東の平地から山地のスゲ類やミズゴケが繁茂する湿地に局所的に分布します。

県内では岩沼市に1か所、加美町に3か所の生息地がありましたが、現在では加美町の一つの池沼に残存するのみです。環境的な変化が認められない中、本種の特異的な減少が進行し、北方種であることから温暖化による絶滅が懸念されています。

(執筆：牧野 周)

トンボ目モノサシトンボ科

ゲンバイトンボ

Platycnemis foliacea sasakii

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-----------------------	-------------------



(撮影：牧野 周、撮影地：大和町)

全長4cm程度のイトトンボで、雄の中脚と後脚が軍配のように広がる特徴のある形態を持ちます。6月中旬から8月にかけて、水質の良好な河川の中流域や細流に見られます。

宮城県が種の北限で、東北地方で唯一の産地となっています。福島県の産地は東日本大震災の大津波で絶滅した模様です。県内では1977年に大和町の河川で発見された後20年以上確認されませんでした。その後、同じ水系の別の河川で再発見されました。その後、その水系の2か所で確認されたが、現在は1か所のみで残存が確認されています。

(執筆：牧野 周)

トンボ目イトトンボ科

オオセスジイトトンボ

Cercion plagiosum

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
-----------------------	---------------------



(撮影：牧野 周、撮影地：涌谷町)

全長4.5 cm程度の大型のイトトンボで、雄は成熟すると美しい水色になります。6月中旬から8月中旬に見られます。東北地方と関東地方、新潟県に局所的に分布し、いずれの産地も減少が著しい種です。

宮城県は本種の多産地を複数有していましたが、化女沼、切伏沼、富士沼、阿川沼では絶滅、伊豆沼・内沼、長沼では本沼で絶滅(隣接する人工池で一部残存)、相野沼と平筒沼では残存していますが、著しく減少しています。農業排水による富栄養化が原因とされていますが、平筒沼ではブルーギルの過繁殖が疑われています。保護は急務です。

(執筆：牧野 周)

トンボ目イトトンボ科

ヒヌマイイトトンボ

Mortonagrion hirosei

宮城県 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	環境省 絶滅危惧ⅠB類 (EN)
-----------------------	---------------------



(撮影：牧野 周、撮影地：名取市)

(執筆：牧野 周)

全長3cm程度のやや小型のイトトンボで、6月下旬から8月下旬にかけて見られます。生息地が海岸沿いの植生豊かな汽水域に限定される珍しい種で、宮城県が種の北限です。

県内では7つの旧市町村で記録されていましたが、現在では石巻市の北上水系の一部に残存するのみとなりました。海岸線の堤防護岸等の工事により産地の消失が続き、そこに東日本大震災の津波により残存産地も破壊されました。福島県の産地も震災で破壊され、県内絶滅の危機はぎわめて高く、保護の取組が続けられています。

トンボ目ヤンマ科

マダラヤンマ

Aeshna mixta soneharai

宮城県 準絶滅危惧 (NT)	環境省 準絶滅危惧 (NT)
-------------------	-------------------



(撮影：牧野 周、撮影地：名取市)

(執筆：牧野 周)

全長7cm程度の複眼と腹部の青色が美しいヤンマです。マニアの乱獲がしばしば問題になることがあります。9月から10月にかけて見られます。北海道から北関東、長野にかけて分布しますが、産地は局所的です。

県内では、海岸沿いの植生豊かな池沼や放棄水田、内陸では伊豆沼周辺に生息が確認されています。海岸線沿いの産地は震災で失われたところもありますが、逆に震災後の被災農地の湿地化に伴い生息分布が広がり、個体数も増加しました。しかし、その後の復興工事でそれらの多くの産地で消滅してしまいました。

トンボ目ヤンマ科

カトリヤンマ

Gynacantha japonica

宮城県 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	環境省 —
--------------------	----------



(撮影：牧野 周、撮影地：仙台市若林区)

(執筆：牧野 周)

全長7cm程度の青緑色の美しいヤンマです。8月から10月に見られます。樹林に隣接する水田などで発生し、かつてはひろく見られる普通種でした。しかし、東北地方全域において減少が激しく、県内では1975年以降は海岸線沿いの後背湿地に残存するのみとなりました。しかし、震災と震災後の巨大堤防と防潮林再生工事で、海岸線沿いの記録も途絶えました。内陸での消失は田植えの早期化や、耕作放棄による乾燥化が原因と推定されていましたが、近年は温暖化の影響か、50年ぶりに内陸で発生が記録されています。

トンボ目サナエトンボ科

メガネサナエ

Stylurus oculus

宮城県 絶滅 (EX)	環境省 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
----------------	--------------------



(撮影：牧野 周、所蔵：山元町歴史民俗資料館、産地：伊豆沼)

(執筆：牧野 周)

全長6.5 cm程度の中型のサナエトンボで、7月から8月にかけて見られました。県内の成虫の確認記録は伊豆沼、化女沼、旧岩出山町だけで、1992年に伊豆沼での羽化殻の確認が最後となっています。亶理町にも古い記録がありますが、亶理町の記録は阿武隈流域に生息するナゴヤサナエの可能性が指摘されています。

近年、関東以北では記録がありません。平野部の大きな湖沼や流入する河川が生息するため、農業の流入や農業排水の富栄養化が要因と考えられています。